

るのはアブラコウモリだけです。なお、コウモリの多くは季節によって住みかを変えながら、小規模な「渡り」をします。なかには鳥のように長距離の「渡り」をするものもいます。

コウモリの生活には樹洞や洞窟が必要であるだけでなく、これらの住みかをとりにく環境も重要です。樹洞のある大木を伐ってしまったたり、洞窟の周辺の森林を切り開くことにより、その地域のコウモリの種や個体数が激減し、最悪の場合は絶滅してしまう恐れもあります。

●コウモリの餌

コウモリの餌は蚊や蛾などの飛翔昆虫です。小型のコウモリ1頭で、一晩に蚊程度の大きさの昆虫を400~500匹食べると言われています。コウモリというと「ドラキュラ」を思い浮かべる人もいますが、日本には吸血コウモリは生息していません。それどころか、害虫となる昆虫をたくさん食べ、人に役立っている益獣です。

コウモリは、天竜川やその周辺の池や川、水田などで羽化した蚊、蛾、カゲロウ・ガガンボなどの水生昆虫を餌にしていると思われる。人間もザザムシを利用しますが、川が育むたくさんの水生昆虫は、コウモリにとっても重要な餌となっています。

●コウモリの種による採餌場所の違い

コウモリは、その翼の大きさや形によって飛翔の仕方が違います。大きな翼を持ったコウモリは高速で飛ぶことができますが、小回りが利きません。そのため、やや開けた空間で餌をとる傾向があります。また、ねぐらから餌場まで長距離移動することも可能です。そのため、大きな翼をもつコウモリは、近くに森林がなくても平気で飛んできます。

翼の小さなコウモリは高速で飛ぶのは苦手ですが、小回りが利きます。そのため、木立の間のような入り組んだ場所で餌をとることができ、中にはホバリングしながら木の幹や葉の上の昆虫を捕らえたりするコウモリもいます。しかし、開けた空間を飛び回るのは好まないようで、近くに森林がないところでは見ることができない種類もいます。



アブラコウモリ

前腕長30~37mm、頭胴長41~60mm、尾長29~45mm、体重5~10g。
屋間の隠れ家は家屋で、数頭から100頭の集団で利用。小都市や大都市近郊でも多く見られる。初夏に1~3仔を出産。寿命はメス5年、オス3年。

●エコロケーションについて

コウモリは暗闇の中でも自由自在に飛び回ります。暗闇の森林の中を飛び回っても、木の枝や幹に激突することがないというのは、我々人間からすると、全く驚くべきことです。いったいどんな仕組みが隠されているのでしょうか？

コウモリが口や鼻から超音波を発生し、それが物にぶつかって跳ね返ってくるのをアンテナのような耳や鼻でキャッチして、その物体と自分との間の距離を一瞬のうちに知ることができます。これはエコロケーション(反響定位)と言って、ちょうど漁師さんたちが船の上から魚群探知機で魚の居場所を探るのと同じ原理です。

コウモリは超音波を使って、我々が目で見える以上のものを見ているようです。コウモリの捕獲調査には、とても細い糸で作られた「霞網」を用いるのですが、小鳥や人間なら簡単に引っかかってしまう網を、コウモリはいとも簡単に見破って、網の数センチ直前でひらりと身を翻し飛び去ってしまうことがよくあるからです。いったい、コウモリは超音波でどんな世界を見ているのでしょうか。



採餌場所

(イラスト：藤原直子)

●冬眠

コウモリは冬眠する哺乳類です。完全に冬眠する哺乳類とえば、日本ではコウモリ以外にヤマネとエゾシマリスなどが知られています。冬眠時には、代謝活動を抑え、体温を気温と1~2℃差の範囲内まで下げ、極端な場合には呼吸も1分間に1回程度になると言われます。この状態をトーパーと言って、コウモリは餌を探しに飛び回ることができない屋間も、冬眠のような状態になっています。こうすることで、エネルギーの消費を抑え、朝から夜までの間に飢え死にしないようにしているのです。朝から夜までの間の絶食により飢え死にするなんて大げさに思われるかもしれ



エコロケーション

(イラスト：劉 靖子)

れません。しかし、コウモリやトガリネズミ、モグラなどのような種類は体温を一定に保つためだけでも、膨大なエネルギーを必要とします。モグラやトガリネズミ類は1日4時間サイクルで活動し、体重と同じくらいの重さの餌を食べると言われます。そのため、朝から夜までの間、何も食べることができなければ飢え死にするとする話も、大げさなことではないのです。エネルギーの消費を抑えることで、コウモリの寿命は、モグラ（3年余）やトガリネズミ（最長17カ月）と比べると7～8年程度と長く、なかには20年以上（キクガシラコウモリ）生存する個体もいると言われています。

●伊那谷のコウモリ相

これまでの調査記録や文献で、伊那谷にキクガシラコウモリ、コキクガシラコウモリ、ヤマコウモリ、ヒナコウモリ、アブラコウモリ、ウサギコウモリなど多数のコウモリが生息することが報告されています。

近年ではシナノホオヒゲコウモリ(ヒメホオヒゲコウモリ)、モモジロコウモリ、テングコウモリ、カグヤコウモリも新たに確認されています。今後、調査が進むにつれ、伊那谷に生息するコウモリの種類数はまだまだ増えることでしょう。

●天竜川のコウモリ相

コウモリの種類は、捕まえてみないと分からないものが多く、しかも街灯の周辺で餌を探して飛び回っているコウモリの捕獲は大変難しいため、天竜川のどのような場所にどのような種類のコウモリが訪れているのか、詳細には分かっていません。しかし、天竜川で見られるコウモリを、河川環境別に大まかな違いを観察するだけなら、バット・ディテクターがあれば多少は可能です。種類によっては固有の波長域の超音波を発することが知られているためです。

天竜川河川敷で検出された、コウモリの出す超音波の波長域から以下のようなことが推定されました。

- ①辰野町から阿南町までの飯田市を除いた地域のうち、近くに森林のない地区では、20～40kHzの波長域のコウモリのみが見られましたが、森林が接近している地区では20～40kHzの波長域のコウモリと、45～60kHzの波長域のコウモリの両方が見られました。20～40kHzの波長域のコウモリはヤマコウモリと思われませんが、45～60kHzの波長域のコウモリは多数いるため、これから種を推定するのは困難です。
- ②飯田市近辺では、近くに森林が無くても、20～40kHzの波長域のコウモリと、45～60kHzの波長域のコウモリの両方が見られました。ここでも20～40kHzの波長域のコウモリはヤマコウモリと思われませんが、45～60kHzの波長域のコウモリは、都市部で良く見られるヒナコウモリ科の一種、アブラコウモリの可能性が高いと推定されます。

ヤマコウモリは、翼が大きくて高速で飛翔することができるため、長距離の移動が可能で、中部地方より北に広く分布することが知られています。20～40kHzの波長域の超音波を出すことも知られていますが、この波長域の超音波を発するコウモリにはヤマコウモリの他にオヒキコウモリが知られているのみです。オヒキコウモリは全国でも確認例が少なく、日本での分布や生態についてはほとんど分かっていません。

天竜川では、この波長域の超音波を出すコウモリは森林からの距離に関わらずふつうに見られたことから、森林からの長距離移動が可能で、天竜川流域にふつうに見られ、20～40kHzの波長域の超音波を出すヤマコウモリであろうと推定されました。

45～60kHzの波長域の超音波を出すヒナコウモリ科のコウモリと言えば、本州で見られるコウモリの大半がこれに含まれます。これに含まれないのはキクガシラコウモリ、ウサギコウモリ、ヤマコウモリの3種ぐらいです。

●アブラコウモリ<イエコウモリ>

家屋内を住みかとするコウモリは、たいていはアブラコウモリと考えられます。長野県内では、飯田、松本、長野と、都市部で多く見られています。伊那市や松川など都市部から離れた地域でイエコウモリと呼ばれるコウモリには、アブラコウモリのほかに、ヒナコウモリとウサギコウモリがいます。さらに人里離れた場所の廃屋には、ウサギコウモリのほかに、キクガシラコウモリがねぐらを求めてやってきます。家屋を利用するコウモリ相も、その周辺の環境によって変化します。

●ウサギコウモリ

ウサギコウモリはその名の通り、ウサギのように大きな耳を持ったコウモリです。このトレードマークの大きな耳は折り畳み式で、寝ているときには畳まれていて小さく見えるので、一見、他のコウモリと見間違ふこともあります。このコウモリは大きな耳を使って獲物を探し、ホバリングしながら、木の幹や葉に止まっている羽虫なども捕らえることのできる特殊な性質を持ちます。

大きな耳を持っている分、他のコウモリのように高く強い超音波を出す必要がないのでしょうか。バット・ディテクターで、低い「ブツブツ」と聞こえるウサギコウモリの超音波をキャッチするのは一苦労です。

ニホンリス (ネズミ目リス科)

●森林に依存した生活

樹上性の小型哺乳類で、木の実や果実、木の芽などの植物質とキノコ、昆虫類などが主な餌です。秋になると、たくさんのドングリを土の中に埋め込んで蓄え、冬に備えます。土中に埋め込まれたドングリは、すべて食べられるわけではなく、一部は翌年に芽を出すことから、ドングリが多く実る豊かな森林を育成するのに一役かっています。

採餌場所として主に広葉樹林を利用しますが、営巣するのは針葉樹林であることが多く、モミヤカラマツなどの枝の付け根に球状の巣を作ります。このため、ニホンリスは広葉樹と針葉樹の両方が見られる森林で多く見られます。

長野県下では決して珍しい動物ではありませんが、天竜川では山から森林が続いている地域でのみ見ることができる、比較的珍しい動物です。水辺には、ニホンリスの大好きなクルミが多く生育していますので、魅力的な餌場になると思われます。段丘崖の林に手を入れ、ドングリなどの実のなる木を育てていくことで、天竜川近辺でもニホンリスを見ることができるようかもしれません。

ニホンリスは近年減少傾向にあり、中国地方や九州では絶滅した可能性が高いと言われています。餌を食べたり営巣するために針葉樹と広葉樹の両方を必要とするため、天然林が伐採されてスギやヒノキなどの針葉樹のみになると、生活していくのが難しくなります。また、伐採や道路開発などにより森林が分断され、孤立化していくことも問題です。1日に数百m以上も移動すると言われるので、森林が分断されると森林から別の森林まで、地上を走って移動しなくてはなりません。ニホンリスのような樹上性の小型哺乳類にとって、地上は猛禽類や肉食動物に襲われやすいほか、車に轢かれるなど危険な場所となります。



ニホンリス

頭胴長16～22cm、尾長14～17cm、体重250～310g。平野部から亜高山帯の森林に生息し、低山帯のマツ林に多い。昼行性で、主に樹上で生活。種子、果実、キノコ、昆虫などを食べる。小枝、樹皮を用いて球形の巣を樹上の枝の間に作る。出産回数は年2回で、春から秋に2～6頭を産む。

ムササビ (ネズミ目リス科)

●樹洞に住む

前足と後足の間に皮膜が発達していて、それを使って木から木へと滑空するおもしろい性質をもった動物です。夜行性で、夜に木から木へと飛び移る様子から「バンドリ（晩鳥）」とも呼ばれます。

樹上性で、地上に降りることは少ないといわれます。餌は木の芽や葉、花、果実、種子など植物質です。住みかは木の幹に空いた洞などで、時には住宅の天井裏に住みつく場合もあります。巣の中には、スギなどの樹皮を細かく割いたフカフカのベットが敷いてあります。



ムササビ

頭胴長27～49cm、尾長28～41cm、体重700～1500g。低地から亜高山帯の天然林、二次林に生息。夜行性で、樹上で生活。ほぼ完全な植物食。巣は大木の樹洞に作る。メスは約1haの同性間なわばりを持つ。出産回数は年2回で、春と秋に1～4頭を産む。



ムササビの住む樹洞

(撮影：澤晶拓夫)

ムササビが生息している木では、その樹洞の周りの樹皮が剥げています。また、その周辺のスギの木では巢材に用いるために樹皮が剥がされていることが多いため、これを手がかりにムササビを探ることができます。樹洞の空いている木があったら、その根元付近の地面を注意深く観察してみてください。植物繊維の固まった、直径5mm程度の小さな丸いフンが落ちているかもしれません。

近年、森林伐採が進んで、山の中には樹洞の空くような大径木が少なくなりました。このため、ムササビは大径木の多く残されている社寺林でよく見られます。天竜川周辺では、天竜峡以外では確認されていません。

ハタネズミ (ネズミ目ネズミ科)

本州、九州、佐渡などに分布する日本固有種です。体型はアカネズミなどに比べて尾が短く、ずんぐりしています。また、目は小さく、鼻もあまり尖っていません。ハタネズミは地下に坑道をはりめぐらし、巣穴を作ります。地表でも頻繁に活動しますが、地下での活動も活発のようです。時にはモグラの掘った坑道なども利用していることがあります。餌は主に草の葉や茎、根など植物質です。



ハタネズミ：体型はずんぐりしている (撮影：澤島拓夫)
頭胴長95～135mm、尾長29～50mm、後足長16.5～20.4mm、体重22～62g。低地から高山帯までに生息し、農耕地、植林地、河川敷など草原的な環境を主な生息場所とする。ハイマツ帯にも出現。緑色草本や野菜の根茎を主に食べる。繁殖期は春～秋で、平均3～5頭を産む。

●畑の害獣？

畑などで農作物が齧られて、モグラの仕業にされることがありますが、実は多くの場合、このハタネズミの仕業であるようです。モグラに害があるとすれば、坑道を作る際に農作物を押し上げてしまう、あるいは水田の畦に穴を開けてしまうので水が流れてしまうことでしょうか。

ハタネズミの名のとおり、畑や水田、牧草地周辺などに広く分布しています。自然林に分布していないというわけではありませんが、主要な生息場所は、人為の影響のある草地的な環境が多いようです。



ハタネズミのものと思われる巣材

●天竜川周辺での生息状況

天竜川河川敷ではハタネズミはほとんど確認できませんでした。これは、生息数が少ないか、あるいは分布が局所的であるからなのかもしれません。ハタネズミとアカネズミは生息場所を分けているという報告もありますので、トラップにかかりやすいアカネズミとの種間関係がハタネズミの確認数の少ない原因となっているののかもしれません。

●山地に生息するよく似た仲間 (スミスネズミ、ヤチネズミ)

天竜川周辺の山地には、ハタネズミとよく似た仲間のスミスネズミやヤチネズミが生息します。これらのネズミの区別は難しく、時には頭骨によって綿密に調べなくてはなりません。共通の特徴として、アカネズミやヒメネズミに比べて足が短く、ずんぐりしていることが挙げられます。これらのネズミは地下で活動することが多く、食性も植物質に偏っているようです。

ハタネズミとヤチネズミ、スミスネズミが同じ場所で捕獲されることは稀で、多くの場合、

標高や環境によって分かれているようです。中央アルプスの例では、ハタネズミは天竜川周辺から人家のある標高900m付近の畑や水田の畦、草地といった比較的人為の影響のある場所で多く見られます。スミスネズミとヤチネズミは主に山地に生息し、ヤチネズミは3,000m級の山々の山頂付近にまで分布しています。ヤチネズミとスミスネズミの関係は、ヒメヒミズとヒミズの関係によく似ています。ヒメヒミズの多く生息する岩場やガレ地にヤチネズミが、ヒミズが見られる場所にスミスネズミが生息します。ヤチネズミはスミスネズミに比べて原始的な自然林を好むようですが、スミスネズミは二次林などでも多く見ることが出来ます。ハタネズミを含めたこれらのネズミの種間関係はあまり調べられていませんので今後の研究が期待されます。



巣穴から顔を出すスミスネズミ

頭胴長70～115mm、尾長30～50mm、後足長15.5～18mm、体重20～35g。低地から高山帯まで分布。植林地、山麓に接した農耕地などに生息する。植物の葉や種・実を主に食べる。繁殖期は春～秋で、平均2～3頭を産む。



ヤチネズミ：ハタネズミに比べて尾が長い

頭胴長79～118mm、尾長50～77mm、後足長18.5～21.5mm、体重19～42g。低地から高山帯まで分布。沢沿いの岩場や畑の石積みなどに生息。繁殖期は夏が中心で、平均3頭を産む。

カヤネズミ (ネズミ目ネズミ科)

本州（福島県以南）、四国、九州や周辺の島々に分布します。主に低地から低山帯まで広く生息し、低地の草地や水田、休耕地などのイネ科植物が生えている湿った場所を好むようです。餌は植物の種子、実などの植物質のほか、バッタ類などの動物質のものも食べるようです。



球巣にもどるカヤネズミ

頭胸長50～80mm、尾長61～83mm、後足長14～16.7mm、体重7～14g。低地の草地、水田、沼沢地などイネ科植物が密生し水気のある場所に生息。水面を泳ぐ。ススキ、スゲ、チガヤなどを用いて球形の巣を作る。巣のある高さは冬に低く、夏～秋は高い。冬季には地表の堆積物や地下に坑道を掘る。繁殖期は大部分の地域で春と秋で、平均5頭を産む。

●球状の巣を作る

カヤネズミの特徴は何とんでも河川敷などに多く見られるススキやオギなどの茎に球形の巣を作ることでしょう。1.5m程の高さに5～6本の葉を寄せ集めて外側の壁を作り、その内部に別の葉を運んできて壁を厚くし、さらにその中にススキやオギの穂綿を敷き詰めて断熱材にします。外から見ると入口がはっきりとしない完全な球の形をしていることで、鳥の巣と区別がつかず。



カヤネズミの生息場所

●茎や葉の上を歩く

体重が非常に軽く、10g前後しかありません。そのため、ススキなどの細い茎や葉の上でも長い尾を巻き付けて自在に移動することができます。これは、ヘビなどの天敵から逃れる手段であるほか、地下に生息しているアカネズミやハタネズミなどとの競合を避けるためと考えられます。



球巣の中のカヤネズミの幼体

●長野県内の繁殖期

繁殖期は春と秋の年2回が普通ですが、諏訪地方では秋に1回だけという報告があります。これは、巣を作るススキなどの植物が秋には大きく成長して葉をからめやすくなることや保温のための穂綿が秋に多いこと、餌が多くなることなどによると考えられています。天竜川でも秋の調査の時に大部分は確認されましたが、巣の確認例の多かった泰阜村の南宮大橋の近くでは、春の調査時に作りかけの巣が確認されました。

●洪水による影響

1999年6月下旬に大雨が降り、天竜川の河川敷はほとんどが水に浸かりました。この結果、河川敷に生息しているカヤネズミなどの小型哺乳類は相当な影響を受けたのではないかと考えられていましたが、秋の調査でオギを中心とする高茎の草地に巣が見つかり、さほど影響を受けていないことがわかりました。増水中にカヤネズミがどのようにしていたのかはわかりませんが、長いこと河川敷に生息していることから洪水のやり過ごし方を知っているに違いありません。

●大きな脅威～火入れ

カヤネズミにとって大きな脅威になるのは、繁殖期の火入れです。河川敷のオギやススキは、洪水の時に水の流れを邪魔したり、枯れた茎や葉が流れ溜まったものが腐ったりして水質を悪化させるため、時期が来ると火を入れて焼かれます。もし、この時にカヤネズミが草の上で繁殖していたら、親子共々焼かれてしまいます。カヤネズミは1年から2年しか寿命がないため、繁殖期の火入れはその場所のカヤネズミを全滅させてしまう恐れがあり、時期を考慮した管理が望まれます。

●天竜川周辺での生息状況

天竜川周辺では、1979年に下伊那郡阿南町で幼体と球巣が最初に確認されました。その後、前述の南宮大橋付近や飯田市川路、阿島橋付近などで確認されたほか、駒ヶ根市や辰野町でも球巣が見つっています。今回の調査では台城公園の近く（松川町）や飯沼橋の下流（中川村）でも新たに確認されましたが、確認された球巣の数が少なく、生息密度はさほど高くないと考えられます。また、天竜川の支川である三峰川の河川敷でも、最近球巣が見つかりました。この場所は、天竜川の合流点から数kmほど三峰川を上流に遡った高遠町内になります。天竜川の河川敷に限らず、カヤネズミにとって良い環境が整っていれば、広く分布している可能性があります。

このように、最近になって天竜川周辺の新たな確認地点が増えています。しかし、伊那谷でカヤネズミが本当に増えているのか、これまできちんとした調査がされていたかどうかはわかりません。この特殊な繁殖形態により河川敷のような生息環境に依存しているため、河川敷や休耕田が整備された結果、全国的には減少傾向にあるとされています。伊那谷でのカヤネズミがどのように分布しているのか詳細に調べる必要があります。



巣を出るカヤネズミ (撮影：両角源美)



天竜川上流におけるカヤネズミの確認地点

アカネズミ (ネズミ目ネズミ科)

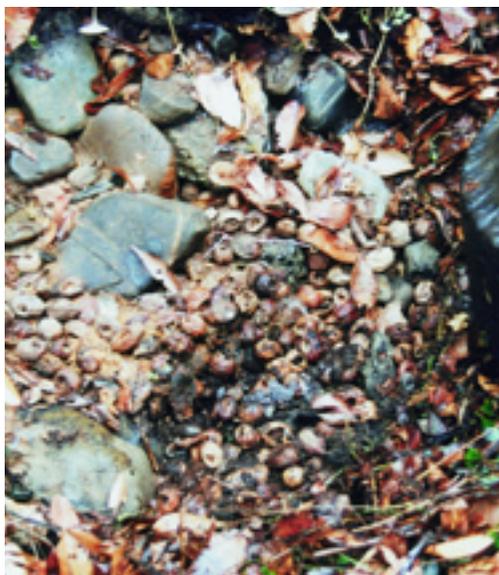
北海道、本州、四国、九州や周辺の島々に分布する日本固有種です。平地から山地まで広範囲に分布し、河川敷や草地、耕作地周辺や森林内など、さまざまな環境に生息し、本州では最も目にする機会の多い野ネズミです。餌は植物の種子や実、根茎、昆虫類などです。



アカネズミ：大きな目が特徴 (撮影：澤田拓夫)
頭胴長80～140mm、尾長70～130mm、後足長22～26mm、体重20～60g。低地から高山帯まで分布。森林に生息するが、河川敷の下生えが密生している場所にも生息。植物の柔らかい根茎部、種実、昆虫類を採食。繁殖期は春と秋で、平均3～5頭を産む。

●クルミを食べるアカネズミ

アカネズミはクルミの殻を削って穴を開け、器用に中身だけを食べます。アカネズミによって食べられたクルミの殻は独特の穴が開いているのですぐにわかります。このような食痕のついたクルミは、河川敷で注意深く探すと簡単に見つけることができます。これらは地表に落ちていることもありますが、石の隙間などに数個がかたまっていることもありますが、時には数十個に及ぶこともあります。辰野町羽場のケヤキ林に捨てられていた古タイヤの下から、食痕のついた数十個のクルミが出てきました。アカネズミはクルミを見つけると安全なところに運んでからゆっくりと食べ始めますので、古タイヤの下はアカネズミにとって安心できる場所だったのでしょう。



古タイヤの下にあったクルミの貯蔵所

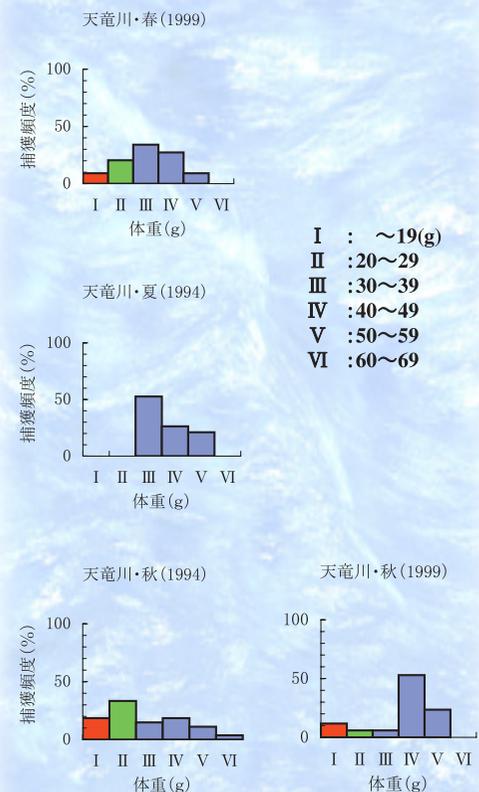
●天竜川河川敷では年2回の繁殖

調査中に捕獲したアカネズミの大きさについて、体重のデータを季節ごとに比較してみました。1994年の調査は春のデータがないので、夏と秋のデータを参考にしています。1999年のデータは春と秋のもので、1994年の天竜川の調査では夏と秋で体重別の捕獲頻度に大きな違いが見られ、特に顕著なのは、幼体(20g未満)の個体は、夏にはまったく見られなかったのに、秋には見られることです。さらに、亜成体が含まれる範囲(20g以上30g未満)の個体も、夏にはまったく捕獲されていません。このことから、天竜川では確実に秋に繁殖していることが推測できます。また、1999年の調査では、春に多数の幼体が捕獲されていますので、天竜川では1年のうち、春と秋の2回繁殖が行われていると推測できます。

●低地と山地の体重差

1994年には天竜川の調査と平行して中央アルプスのシオジ平自然園でも小型哺乳類の調査を行っています(野呂,未発表)。結果を比較すると、低地の天竜川河川敷と山岳地のシオジ平自然園とでは、アカネズミの体重に顕著な違いが見られます。シオジ平自然園では天竜川で頻繁に見られた50g以上の大型個体はまったく見られず、40g以上50g未満の個体さえもほとんど見られませんでした。

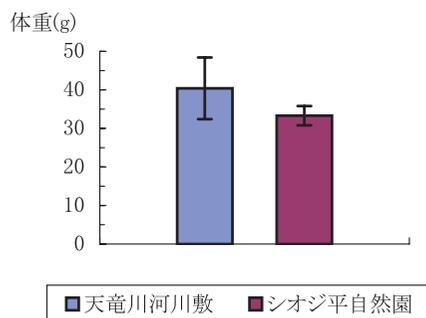
明らかに成体である30g以上の個体と、妊娠個体のいない夏期の体重データを用いて両調査地の平均値を比較すると、平均で8g近い差があることがわかり



アカネズミの体重別捕獲頻度の季節変化

ます。このように、天竜川河川敷のアカネズミは山岳地であるシオジ平自然園のものよりも大型の傾向があるようです。

この体重の違いは、間接的にはおそらく調査地の標高の違いが影響しているのかもしれませんが、直接的な要因は季節的な気温の変化や利用できる餌資源量の違いが関係しているのかもしれない。



アカネズミ成体（30g未満の個体を除く）の調査地点別平均体重

●山地に生息するヒメネズミとの関係

アカネズミの仲間にヒメネズミがいます。ヒメネズミはアカネズミよりも小型で尾が長く、華奢な体つきをしているので、可愛らしい印象があります。主に山地に生息し、3,000m級の山々の山頂付近まで生息していますが、天竜川の河川敷にはまったく見られないようです。標高の高い地域では草地的な環境で見られる場合もありますが、ふつうは自然度の高い森林に多く生息しています。天竜川の河川敷はアカネズミの天下ですし、標高が上がったとしても、山地から孤立した雑木林のような環境では、アカネズミしか見られません。ヒメネズミの生息には山地と連続することが重要な条件であると考えられ、山地が水田や農耕地近くにまで迫っているような所では、水田の畦などでも見ることができます。

アカネズミとヒメネズミは多くの場所で混生しますが、生息場所はある程度分かれているようです。基本的に伊那谷ではアカネズミが標高の低い地域に多



山地に生息するヒメネズミ：アカネズミより小型で華奢な体つきをしている。

(撮影：澤島拓夫)

く生息し、ヒメネズミは標高の高いところに多く生息しています。中央アルプスでは標高900~1,500m付近で混生するところもありますが、アカネズミがもっと標高の高い場所で見られることもあるようです。この2種が混生する地域では、確認される場所も微妙に違うようで、アカネズミは木の密度が低く草本の少ない場所で多く見られるのに対し、ヒメネズミは木の密度が高く、ササなどの下草の茂る場所で多く見られます。また、花崗岩の巨礫が分布する地域にはヒメネズミが多いようです。ヒメネズミはアカネズミに比べて樹上性が強く、立体的な行動が得意です。ヒメネズミが木の密度が高い場所や、岩場で多く見られるのは、このようなことが影響しているのかもしれませんが、いずれにしても、アカネズミとヒメネズミの生息場所はある程度異なっており、競合を避けているようです。

●天竜川周辺での生息状況

アカネズミは天竜川河川敷のいたるところで見られ、また、確認数も一番多いネズミでした。ツルヨシの密生した場所や、大きな石が重ねられた場所、蛇カゴ周辺、倒木の下などで多く確認できました。しかし、ヤナギ林の中ではあまり確認できませんでした。ヤナギ林には下草もほとんどなく、被覆物になるようなものが少ないため、あまり利用されていないのかもしれない。



ツルヨシが生い茂るアカネズミの生息地